



Malawi Voice vol.14

～アフリカの国・マラウイからのおたより～

青年海外協力隊 平成27年度3次隊
言語聴覚士 飯田知美

ごあいさつ

6月といえば「梅雨」という感覚が、6月といえば「冬」に変わりつつある今日この頃、マラウイ2年目の冬を迎えています。今年は比較的暖かいため、過ごしやすいです。

さて、6月5日頃からマラウイ全国では、公立学校の先生たちによるストライキが続いていました(19日から通常通り勤務)。年末に支払われるはずの特別手当(日本でいうボーナスでしょうか)が政府から6月になっても支払われず、これに反発した先生たちが授業を放棄していました。さらに、学ぶ権利を奪われた生徒側も、この状況に反発し、各地でデモや暴動が発生したようです。配属先の近くでデモが発生した隊員仲間によると、主要道路にレンガや大きな石がどんどん投げ込まれ、露店では混乱に乗じて窃盗被害も出たとのこと(普段、ミニバスのフロントガラスにひびが入っているのをよく見かける理由が分かった気がします)。この状況を収めるため、警官隊が催涙弾を打ち込むまでに、事態は悪化したそうです。幸い私の任地付近ではこのようなデモ活動は見かけませんでした。ストライキに賛同している先生と校長先生の間で、激しい口論が繰り広げられるのは何度か目撃しました。通常の学校の場合、先生がストライキをするとわかった時点で、生徒たちは学校に行っても授業がないので、そもそも登校しないのですが、私の配属先のような全寮制の学校の場合、生徒たちは登校しなければならず、時間を持て余してしまいます。先生全員がストライキを行っているわけではなかったため、私の学校では限られた先生(と私たちボランティア)で授業を行いました。

ちなみに、私の学校の先生の“ボーナス”は9000クワチャだったそうで、日本円にしたら1300円程度です。日本人の金銭感覚からすると、「このお金のためにここまで…」と思ってしまうかもしれませんが、国民一人あたりのGNI(1年間の所得の平均)が350米ドル(2015年世銀)のこの国の人々にとっては、大変貴重なお金です。とはいえ、お金を支払って学校に通っている生徒たちのことや、普段遅刻や世間話が多い先生に限って率先してストライキに賛同している現状を目の当たりにしてしまうと、とても複雑な気持ちでこの2週間を過ごしました。このような長期にわたる混乱が落ち着き、ようやく私の任地も“いつもの日常”が戻ってきてホッとしています。

2017年6月
飯田知美

マラウイのお金と経済状況

今回は、先ほど少しお金のことについて触れたので、マラウイのお金と経済についてお話ししようと思います。“最貧国”と言われるマラウイの現状をお伝えします。

1. マラウイのお金の種類

マラウイのお金の単位は、このおたよりでもよく“クワチャ (Kwacha)” とご紹介していますが、実はクワチャよりも下の単位として“タンバラ (Tambala)” というお金もあります。小学校の算数の教科書では頻繁に目にするタンバラですが、実際の生活の中（地域を問わず）で使用されることは現在 0 に近いと思います。私はそもそも市場でこのお金を見たことがありません。生徒が持っていた硬貨を見たことがありますが、私たちが“昔の 100 円札！” とコレクションとして持っておくような感覚で、実際に使用することはないようです。それぞれのお金を写真とともにご紹介します。

【タンバラ (Tambala)】 ※100 タンバラ = 1 クワチャ



上の写真は小学校 2 年生の算数の教科書の図です。タンバラは全て硬貨で、1、2、5、10、20、50 タンバラ硬貨があるそうです。上の写真は左から順に、10、20、50 タンバラです。市場では幻のお金ですが、意外と家に置いている人は多いようです。

【クワチャ (Kwacha)】

クワチャには硬貨と紙幣があります。まずは、硬貨から紹介します。下の写真左から順に 1、5、10 クワチャです。5、10 クワチャは以前に発行されていた古い硬貨を今でもよく目にします。1 クワチャは、タンバラと同様に現在は市場ではほとんど使用されていません。そのため、例えば買い物に行き「14 クワチャのお釣り」となった時には、4 クワチャが切り捨てられ、実際には「10 クワチャのお釣り」を受け取ることになります。



続いて次のページは紙幣の写真です。マラウイの紙幣には、表面に日本の紙幣と同様に歴史上活躍した人物と中央銀行、裏面に主要な建物が印刷されています（表面のみ掲載しています）。



上から順番に
20 クワチャ札
50 クワチャ札
100 クワチャ札
です。おつりを持っていない人が多い地域のマーケット、学校の周辺でおやつを買うときに活躍します。



上から順番に
200 クワチャ札
500 クワチャ札
1,000 クワチャ札
です。こちらは主に、ミニバスや町での大きな買い物の時に活躍します。

そして、2016年の11月頃に、マラウイに新しいお金2,000クワチャ札が誕生しました。この2,000クワチャ札の誕生により、スーパーでの待ち時間が少し短くなりました（スーパーでは大量買いする人が多いので、例えば、5万クワチャの買い物をした場合、1,000クワチャ札だと50枚数えなければなりません）。

私たちの感覚からすると、なぜ1万クワチャ札を作らなかったんだ…とってしまいました。ミニバスやマーケットでは、おつりを持っていない人も多く、高額紙幣を作ってしまうと、農村部で混乱が生じることになると思います。実際に、350クワチャのパンを買うのに2,000クワチャで支払ったとき、おつりをもらうのに15分ほど待つことがありました。



【番外編…】

マラウイの人は物の扱いが雑…ということは以前ご紹介しましたが、お金の扱いも雑。例えば、ミニバスのコンダクター（乗客の世話やお金のやりとりをする人）が、渡したお金を紙くずの様にグシャッと握りしめる姿を見かけること、洗濯物のポケットからお札と一緒に洗われて出てくることも。そして、おそらく日本のように定期的に銀行が回収して新札と取り換えることもないと思われます。

そんな様々な状況を乗り越えてきたであろうお札が右の写真です。持った感触はまるで湿ったキッチンペーパー。破れないように所持するのに気を使います（でも意外と破れません）。



2. マラウイの経済

世界銀行が発表した国民一人あたりのGNIは、先ほどご紹介した通り、350米ドルです。つまり、マラウイの人々は、1年間の平均的な収入が約35,000円しかないということです。これを月給に換算すると1ヵ月3,000円弱。日給は100円ほど。日本円でみるといかに収入が低いかが分かりやすいと思います。このGNIの低さが、「マラウイは世界最貧国！」と言われる大きな要因となっています。

さて、私は実際に1年半以上この国で生活してきましたが、実際の人々の様子はどうでしょうか。確かに、ボロボロの服を着たり、町で物乞いをする人を見かけることはあります。しかし一方で、かなり裕福な人もいます。私がこの1年半で感じたことは、「貧富の差が激しすぎる」ということです。そこで、あくまで生徒や友人に聞いた話と、実際に家庭にお邪魔した体験をもとに、“農村部”と“都市部”の生活状況の違いを少しご紹介してみたいと思います

【都市部の生活状況】

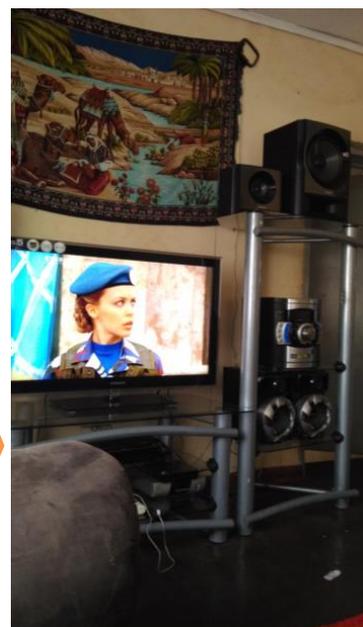
都市部でも、“貧困層”と呼ばれる生活を送っている人々もいます。ここでは、都市部に住む“富裕層”のマラウイ人の生活の状況をまとめてみたいと思います。

- 車を持っている家が多い。私がお邪魔した家では車を2台所持していました（うち一台はBMW）。
- 敷地をレンガ塀で囲われた一軒家が多い。ウォッチマンや家事手伝い（メイド）を雇っている家が多い。
- 電気、水道があり、テレビは衛星放送を契約してチャンネル数が多い。
- ダンスパーティ用のオーディオ機器が多数。
- 早期教育に力を入れている。幼稚園から英語教育を開始し、年中長の年齢から小学校に通わせ始める。学校は、ヘアスタイルの指定のない私立の学校に通わせていることが多い。
- 両親ともに英語を話せる家庭が多い。特に父親は大学を卒業して、公務員や会社員、経営者のことが多い。



基本的にどの家も家族数が多いので、日本の一軒家よりも、敷地が広い印象です。

マラウイの人はとにかくダンスが好き。この家には、大きなスピーカーが数台あって、クリスマスや誕生日のパーティではみんなで踊るそうです。



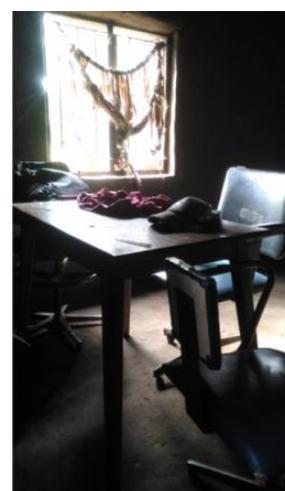
大きなベッド。夫婦の寝室かと思っていましたが、うちの生徒の一人部屋でした。この大きなベッドに一人で寝ているそうです。



【農村部の生活状況】

マラウイの大多数の人が農村部で生活しています。私は配属先の生徒の家にお邪魔することが多いので、マラウイの一般家庭より“少し良い生活”をしている農村部の生活状況になっていると思います（1学期 10,000 クワチャの料金を支払える家庭）。

- 家でも家の周辺でも車を見かけることはほとんどなく。自転車を持っている家は見かけるが、村の中では裕福な方。
- 家の敷地の区切りは、畑や果物の樹。一本一本の樹には持ち主がいる。
- 電気や水道はない。道に街灯などもないので、夜は真っ暗で、寝る時間が早い。生活用水は井戸を使用。屋根から落ちる雨水をためて、使用することも。
- 小学校は無償のため、全員通うことが可能だが、筆記用具や制服が買えずに途中でやめてしまうことも。また、「学校よりも家の仕事を手伝う方が良い」と考えている親もいる。無事に卒業して、セカンダリースクールに合格しても、授業料が払えずに通えない場合が多い。
- 両親（特に母親）が英語を話せない場合がほとんど。



以上のように同じ国に暮らしていても、生まれた環境によって大きく生活が異なることがわかります。特に、教育の部分で、子ども達が受けられる教育環境が大きく異なります。このことにより、裕福な家庭の子ども達は、セカンダリースクール・大学と高度な教育を受ける機会が得られることが多く、卒業後に良い職について、結果的にその後も収入の高い“富裕層”となります。一方、小学校を途中でやめてしまった子どもは、英語を話すことができず（マラウイの都市で働くうえで、英語は必須です）その後定職につくことができないまま“貧困層”としての生活を続けていくしかなくなります。インドのカースト制度ではありませんが、「生まれながらにして、生涯の貧富の度合いがある程度決まってしまう」という現状のような気がします。

日本のように、「貧乏な家に生まれたけれど、頑張って勉強して奨学金をもらいながら良い大学を出て成功した！」というサクセスストーリーは、マラウイでは日本よりハードルが高いように感じます。まず、“奨学金”という制度がほとんど普及していません。そして、セカンダリースクールに行くためには、小学校の卒業試験に合格する必要があります。小学校の段階で中退してしまっている場合、もう一度小学校からやり直し…となります。日本であれば、「定時制」「通信課程」「大検」など、いろいろな制度がありますよね。もちろん、この貧困の連鎖を抜け出す人がいるのも事実です。



5月の活動の様子



5月17～19日に8年生の生徒の卒業国家試験がありました。授業を受け持っているわけではないので、クラス全体に向けてできることはないのですが、単語の意味を質問に来る生徒に説明をしたり、算数の問題を作ったりして少しサポートしました。7年生の英語の講座をするようになってから、手話とジェスチャーをミックスした単語の説明がすっかり得意になりました。最初の頃は「なんだそれ！」と笑っていた生徒も、今では動きが面白いためか、やたらと質問に来るようになりました。

それでは、5月の活動（言語聴覚士としての…）の様子をいくつかご紹介します。

①補聴器のメンテナンス、装用指導

4月にたくさんの生徒が補聴器を手に入れました。ところが、電池の交換を先生にお願いしてもなかなかすぐにもらえなかったり、ボリュームの操作法を知らずに「聞こえないからつけない！」と使用を辞めていく生徒が増える一方です。

そこで、補聴器担当の先生と一緒に、2週間に1回「電池交換の日」を作り、時に教室にお邪魔して補聴器の状況チェックをしています。

②補聴器がもらえなかった生徒への補聴器寄付とイヤープラグ調整の指導（先生へ）

様々な事情で補聴器を手に入できなかった一部の生徒へ、以前別の生徒に貸し出していた日本から持参した補聴器を貸し出しました。

前回、貸し出し時の説明は、先生に誰も補佐をしてもらえなかったのですが、今回は校長と事前に日程の打ち合わせをして、補聴器担当の先生と一緒に行うことができました。今回は、イヤープラグの選択、チューブの長さの調整、基本操作の説明、取り扱い・管理方法の説明（実物とイラスト）を伝えました。



③「聴能訓練」の授業の補佐

配属先の学校は聴覚の特別支援学校なので、通常の学校とは異なる授業がいくつかあります。例えば、「スピーチドリル」「センストレーニング」などがあり、その中の1つに「Auditory training（聴能訓練）」という授業があります。しかし、実際には特に何も行われずに、通常の国語や算数の授業が継続して行われていることがほとんどです。そこで、プレスクールの授業に参加して、一緒に音当てゲームなどを行っています。



一番小さい学年のオーディトリートレーニングの授業。この日は、太鼓の音を集中して聞き、聞こえたらしゃがむゲーム。この遊び自体は、私が考えたものではなく、先生がこれまでよく行っていたものだそうです。

～ 生活の様子 ～

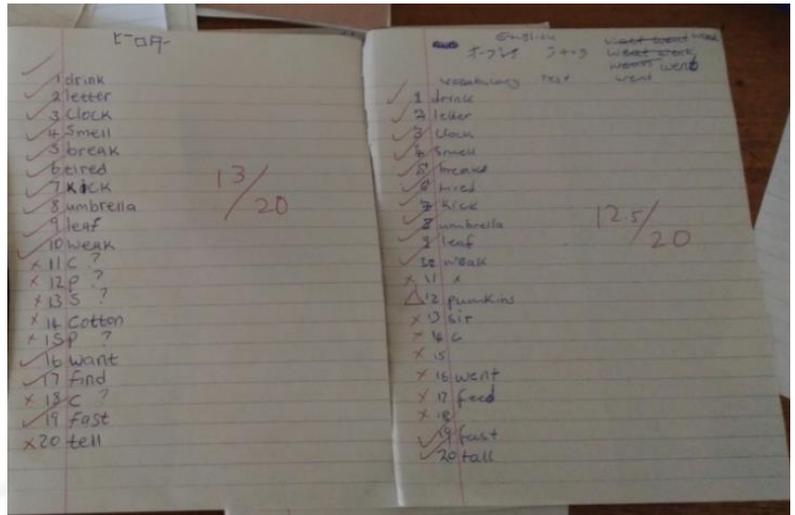
先生が休みで授業を任せられた日。ニュージーランドボランティアと一緒に「芸術」の授業。葉っぱを写し書きしました。



毎週月・水・金曜日の放課後にある職業訓練コースの1つ。この日はバケツなどを作るコースの見学。写真は如雨露を作っています。



毎週火曜日の放課後に行っている基礎英語授業。毎週英単語の小テストを行っています。時々カタカナで名前を書いてきてくれる生徒がいます。



ある日突然どこかからビスケットの寄付が…マラウイ、特に障害児を抱える私の配属先では、欧米やインドの団体からこうした突然の寄付が来ることがあります。